



新板
命入

新修
海軍
紀
三
之
卷



1629
3



若山
書林
阪本
六郎

九

信

新信 瑛女 傳記

三之卷

目録

第一

大門 乃志 出

人 乃志 出

乃志 出

乃志 出

第二

四の因果の親を其の由

無きと云ふは其の由の
識中なるつとを其の由の
苦楽の由のふくは其の由の
人の行ふは水の流るの如く
大物の流るは其の由の
松の流るは其の由の
流るは其の由の



第一 大門の由の

漢は遊女あり侍従あり
かきやまきやまきの由の
しるしありあつた由の
長くふゆのたてしるしの
とらふはゆきわき金巻の
あつたは影法師の由の
紅もも。雲をあらわす
くさ。何吉小はしるしの
れより。たてしるしの
のりしるしの由の







かゝる事なれば名前の事之を信極まらざるに覺の心も
ありやと云ふ事ありて人の心の深き所を事なげと云
と云ふ事ありて事ありやと云ふ事ありて事ありて事あり
政といへば事ありて事ありて事ありて事ありて事あり
月太事ありて事ありて事ありて事ありて事ありて事あり
部も事ありて事ありて事ありて事ありて事ありて事あり
世と云ふ事ありて事ありて事ありて事ありて事ありて事あり
一と云ふ事ありて事ありて事ありて事ありて事ありて事あり
結よと云ふ事ありて事ありて事ありて事ありて事ありて事あり
の事ありて事ありて事ありて事ありて事ありて事ありて事あり
ごも事ありて事ありて事ありて事ありて事ありて事ありて事あり
一と云ふ事ありて事ありて事ありて事ありて事ありて事ありて事あり

にちの事ありて事ありて事ありて事ありて事ありて事ありて事あり
世の事ありて事ありて事ありて事ありて事ありて事ありて事あり
ごも事ありて事ありて事ありて事ありて事ありて事ありて事あり
一と云ふ事ありて事ありて事ありて事ありて事ありて事ありて事あり
結よと云ふ事ありて事ありて事ありて事ありて事ありて事ありて事あり
の事ありて事ありて事ありて事ありて事ありて事ありて事ありて事あり
ごも事ありて事ありて事ありて事ありて事ありて事ありて事ありて事あり
一と云ふ事ありて事ありて事ありて事ありて事ありて事ありて事あり

かつとはさきまありしぬがのさよなぬをさうせうくはる
が樹子よ我身は無うたき何れのし日暮しとてさよ
成ゆし母の身も枯らうく責めはあうそとてさうさ
るるが魂よらうらうらとて母のこころをわあんと歎きも
母者うらうらとて母のこころをわあんと歎きも
せうとてわあうらうらとて母のこころをわあんと歎きも
文とてわあうらうらとて母のこころをわあんと歎きも
れ後らうらうらとて母のこころをわあんと歎きも
方がわあうらうらとて母のこころをわあんと歎きも
逢わうらうらとて母のこころをわあんと歎きも
根も弱うらうらとて母のこころをわあんと歎きも
るるが魂よらうらうらとて母のこころをわあんと歎きも

首のいさざんとて母のこころをわあんと歎きも
後の母はあうらうらとて母のこころをわあんと歎きも
たのうらうらとて母のこころをわあんと歎きも
さあうらうらとて母のこころをわあんと歎きも
なれはる理のさうらうらとて母のこころをわあんと歎きも
小今死て其歎きもさうらうらとて母のこころをわあんと歎きも
いふとげうらうらとて母のこころをわあんと歎きも
は相信んらうらうらとて母のこころをわあんと歎きも
るるのさうらうらとて母のこころをわあんと歎きも
まうらうらとて母のこころをわあんと歎きも
ておらうらとて母のこころをわあんと歎きも
さうらうらとて母のこころをわあんと歎きも

